環境に迷惑をかけずに生きていけますか。

人文学部サタデーカレッジ修了生　岡本　操

□はじめに

「他人に迷惑をかけないようにしなさい。」幼い頃から周囲の大人たちに言われ続けてきた。迷惑をかけないようにと心がけてきたつもりでも、友人と喧嘩したり、親や先生に心配をかけたり、日常生活を送っていく中では、相手から影響を受けたり、場合によっては他人に迷惑をかけていることもある。

環境問題に置き換えてみて、私たちは、自然環境に迷惑をかけずにいられるだろうか。「手つかずの自然」と観光パンフレットによく書かれているが、例えば、深い森の落葉樹の青葉や紅葉を楽しむ場合、ある程度林道が整備されていないと、深山幽谷の雰囲気にふれることはできない。人間好みに手を加えた自然環境でなければ、怖くて近寄ることもできない。

私は、２０年前にここの経済学部を卒業した。以来、日常生活を経済効率の視点で見つめてきた。買い物をするときはできるだけ安価なものを選んできた。けれども、地球的規模で環境破壊が進むにつれ、無農薬とか、有機栽培といった言葉が気になり、価格だけで商品を選択することはなくなってきた。経済効率の視点に加え、人間の経済活動を生態系も考慮しながら見直していかざるをえなくなったのである。

ここでは、広範囲にわたる環境問題の中から、自分の生活を振り返りつつ経済活動と環境との関わりについて考えたことを述べることとしたい。

□四大公害問題に対する関心

１９６０年代、小学校低学年だった私には、自宅や校庭でできた氷柱をほおばったり、祖母が雪をかき氷のようにして食べさせてくれた記憶がある。水は、身体や心の渇きを癒してくれる一方で、汚染物質の運び屋にもなりうる。私が氷柱を平気で食べていたころ、人体への影響も気になるところであるが、当時はまだ自然に浄化能力があったと思っておきたい。

その後、数年も経たないうちに、センセーショナルに日本の四大公害が報道されはじめた。１９７０年頃であり、私は、公害を垂れ流す企業と規制的手段を徹底して講じることのできない行政が悪い、とただ考えていた。

四大公害裁判は、結局、加害企業に対する訴訟は原告側の勝訴に終わったが、私は、この問題は、煤煙の規制や、工場排水の処理技術を高めるだけで解決すると思っていた。ある日、中学校の先生に、海に溜まったヘドロを取り除けば海はよみがえるのに、どうして国はそういうことをしないのか、と質問した。先生から、海底に溜まったヘドロの取り除き方を誤ると、海水が攪拌され海洋汚染が拡大するから、取り除かない方がいいという回答が返ってきた。私は、いったん壊してしまうと、もとには戻らないかけがえのないものがあることを学んだ。

□加害者意識の芽ばえ

周囲に小川が流れている我が家では、この川の水で米をとぎ、鍋を洗い、洗濯物の濯ぎまでしていたことがある。民家が周辺に少なかったため、このような利用の仕方をしても川の水は自然に浄化されていったのかも知れないが、環境問題に対する人々の意識も高まってきた今日からみれば、考えられないことである。これも、氷柱を食べていた１９６０年代のこと。

１９８０年代を迎える頃、新たに、家庭ごみ、生活雑排水、自動車の排気ガスなどの問題が加わり、消費者である我々も、自然環境に影響を及ぼしている加害者側に立っているという、当事者意識が芽生えた。家の周囲を流れていたあの川も、その先の下流、そして海につながっていることを想像し、水を汚さないようにしようと心がけるようになった。

消費者が加害者であるならば、世の中のほとんど全員が悪者である。環境問題に対して当事者意識が芽ばえたという意味では、私にとっては進歩かも知れない。消費者として、あふれる商品や電気を多量に消費する便利な生活を楽しむ、その勢いを止めることはできなかった。環境汚染を少しでも食い止めるためにどこから手をつければよいものか、経済成長に伴う豊かな生活と環境問題、この時点で同じ土俵で考えることはしていなかった。

□経済理論と環境保全

大学生の時、簡単に言えば、個人消費、企業の設備投資そして輸出が国民所得を生み、その所得が個人消費を引き上げるという経済理論を学んだ。所得が増えることはいいことだ。生活が豊かになるから。私たちは、生活を豊かにするために、経済活動を営んできた。右肩上がりの経済成長を技術革新が追い風となり、限られた資源を有効に活用してきた。オイルショックという危機に直面しても、生産性を向上させるために官民が努力し、技術の進歩もみられ、一定の成果をあげることができた。

経済成長に対する資源、環境の制約条件を重視する考え方も従前からあり（マルサスの『人口論』など)、１９７２年にはローマクラブが『成長の限界』を発表するなど、文献を通じて学ぶ機会には恵まれていた。また、自動車の所有台数が増えることに伴う大気汚染、道路整備による森林の消失、石油化学コンビナートに代表されるような大規模工場の操業がもたらす大気汚染、海洋汚染など、私は、同時代の現象として目にしていたにもかかわらず、環境保全にかかるコストなど、自分のこととして数式化、モデル化することはできなかった。

四大公害問題といわれるものも原告勝訴のうちに終息に向かう一方、チェルノブイリ原発事故、酸性雨の問題など、地域の境界を超え、地球的規模で環境汚染を考え、人類の行く末まで不安になるような事態に向かいつつある。環境汚染の原因を作ってきたのは、まさしく経済理論に出てくるところの企業や消費者であるのに、私の頭の中では、経済理論の中に、環境問題を参入させる方法がつかめないでいた。環境保全にかかるコスト計算ひとつとっても、手がかりがつかめないでいた。

大学を卒業する頃、１９８０年代、高度情報化社会の到来が声高に叫ばれ、情報産業が日本経済の活気を上向きに押し上げてくれる期待感があり、情報関連企業は、大卒男女を大量に雇用した。当時、情報、新素材など、技術の進歩は、経済成長の牽引役となり、もしかしたら、公害問題をも解決に向かわせてくれるのではないかと淡い期待を寄せていた。

環境問題への関心は、誰もが多かれ少なかれ持っていると思う。しかし、環境問題を生活の糧にしている人、できる人というのは、全体のほんの一握りに過ぎない。生活するために、とりあえず職を探すというのが一般的な学生、労働者の行動パターンではないだろうか。雇用と環境問題とどちらを優先するか。私が就職先を決める時も、就職先や業務内容が環境問題に配慮しているかどうかという評点は優先順位として高くなかった。

今日では、環境問題に配慮していない企業というのは、消費者や就職しようとする若者たちから見放されてしまうし、環境保全を目指した製品の開発は、企業の設備投資や個人消費を刺激する要因にもなる。環境問題に対する人々の認識が高まり、企業行動も、それを無視できなくなった。経済活動と環境保全の問題は、私の頭の中でだんだん近づいてきた。

□生態系の中の経済活動

リサイクル問題を考えるとき、できるだけ廃棄物を出さないのが第一である。が、やむをえず廃棄物が生じることがある。この廃棄物を回収するのに、大変コストがかかる。商品を消費者に届けるためには、さまざまな配送ルートがあり、世の中のすみずみにまで商品が届けられている（コンビニエンスストアなどで２４時間営業したり、通販で気軽に買い物できる商品もある）というのに、その逆の流れ、すなわち、廃棄物の回収の流れはまだまだ改善の余地があ

る。逆流させるためのシステムの確立が待たれるところである。また、公害問題を論じる時に企業倫理についてさんざん言われてきたが、今度は、我々も消費者として環境に配慮するというモラルある行動をすることが問われている。

経済活動は、経世済民、人々が豊かになるために必要なシステムであるが、所詮、生態系の中での一こまの動きに過ぎない。生態系をはみ出してまで、経済活動というのはありえないことである。とにかく、環境保全だといって、費用対効果の観点からみて採算のとれないような計画も、長続きしないと思う。ソーラーシステムを導入する家庭も増えているが、何年発電すれば採算がとれるかを考えたとき、我が家では設置に踏み出せないでいる。環境保全の面でソーラーシステムがもたらす利点は多いが、設備がいずれ老朽化したとき、それが廃棄物になることは間違いない。生態系の中で人間の営みを続けていかれるよう、環境に負荷のかからない、迷惑をかけすぎない経済活動ができるよう、我々は考えて行動しなければならないと思った。

ところで、環境はタダではないことはみんな知っている。環境問題に取り組む市民団体の熱意ある行動に心打たれることも多いが、行政、企業と立場が変わるとなぜ温度差があるのか。環境保全にかかるコストを何らかの方法で数値化し共通認識を持たなければ、異なる立場の者たちが生態系の中での経済活動のあり方を論じる際、共通の土俵に立って考えることはできまい。経済活動が環境に及ぼす影響、環境保全にかかるコストを算定できる影響評価の方法が欲しいところであるが、まずは、算定に必要な数値を、企業や行政は、情報公開していくことが必要となるだろう。

□環境に配慮した生活

もはや経済活動も、生態系の中で、環境に配慮しながら取り組まなければならない。消費者として、働く者として、日常生活の中でどのように環境に配慮した取組をしているか、自分の行動を振り返ってみた。

〈消費者として〉

○生ゴミの処理

とにかく、家庭でゴミを多く出さないように、買い物をするとき、包装の少ないものを選ぶようにしている。

生ゴミについては、自宅の家庭菜園で、肥料として活用している。生ゴミに含まれる果物の皮などに残留農薬が含まれていれば、公害の再生産をしていることになるため、食品を購入する段階で、農薬の使用状況を気にするようになった。

○植林ボランティア

中国の黄河流域で植林ボランティアをしたことがある。私の植えたポプラの苗木は、数年経ったら、中国大陸の砂漠化を少しでも防止することに役立つのだろうか。観光旅行付きの旅であったが、地球的規模の環境問題に目を向ける契機になった。

○バラの花を買って、アフリカの農民を思い浮かべる

アフリカの東部では先進国向けのバラ栽培をし、農地の近くの湖が干上がったり、地下水位が急激に下がったりするなど、環境破壊が進んでいることを最近知った。美しいバラの花は、プレゼントする相手に想いを伝えることができる。さらにじっくり花を眺めている　と、アフリカの農地と農民が見えてくるような気がする。

同じように、輸入された養殖エビやナタデココの生産の向こうに、アジアの環境破壊が見えてくる。

〈働く者として〉

○環境政策の取組

現在、県職員として働いている。県では、環境基本計画を策定し、環境行政に計画的に取り組んでおり、環境施策は環境生活部の所管である。また、職場で以下のことに取り組んで

いる。
○ノーマイカーデーの取組（月２回）
　職場で、ノーマイカーデーに取り組んでいるが、山口市内の公共交通機関の整備は十分とはいえないので、日常的にノーマイカーを実施するには厳しい面がある。健康のためにも自転車通勤をしたいと思うが､自動車通勤の便利さを手放したくない気持ちが心の奥底にある。自動車から自転車通勤に大勢の人がシフトしたら自動車会社の売り上げが落ちるかも知れない、と大袈裟にいえば、産業構造が変わることまで考えが及んでいく。
○ゴミ箱を置かない職場
　個人用のゴミ箱を撤去している。これは、ごみの少量化に取り組む職場の姿勢を示すものである。個人用のゴミ箱があったときに比べ、ゴミの量が減っている。

□個人のモラルに頼るだけでいいのか。
　価格が安い方に手が出ていた私の消費行動も、環境問題を考えていくうちに、無農薬、有機栽培という言葉や食品の包装にまで目を向けて買い物をするようになった。自分の行動をふりかえり、環境に配慮した生活をしようと心がけるようになってきた。いわば、環境保全型の消費生活をするようモラルが芽ばえてきた。これは、情報の力、教育の力に負うところが大きい。
　「環境」は、「公共財」（他人も同じように享受でき、かつ、他人に享受させないようにするためには非常に高い費用が必要となるもの）であるといえる。その公共財は、今、瀕死の状態である。環境に配慮した行動をとることを、個人のモラルに頼るだけでは限界がある。フリーライダー（ただ乗り）を見逃してはならないが、行政による規制的手段のみでは、いたちごっこに終わってしまう。環境政策の手法として、規制的手段の他にも、補助金や課税制度など考えられ実施されているが、行政の財源不足の問題もあり、いずれも恒久的に続けられるものではない。企業が環境に配慮した製品開発、技術開発を自発的に取り組み、消費者が環境に配慮することが自分たちの利益にもなるとして当然の行動のように取り組むような、そんな経済社会に向かっていくようなシステムづくりが急がれるところである。そのことが、地域経済の活力にもなればなおさらうれしいことである。能力不足で、その答えが今は思いつかない。これから、個人のモラルに頼るのでなく、企業や消費者が自発的に環境配慮型の行動をとっていく、とっていかざるをえないような社会のしくみを考えていきたい。

□おわりに
　環境問題は、我々の身近な問題であるため、誰もが関心を持っていることである。私の場合は、四大公害問題から関心を持つことができた。これからも、大学時代に学んだ経済理論に環境問題をうまく参入させながら、生態系の中で人が豊かに生活していくことができるよう、考えていきたい。
　山口大学排水処理センターでの施設公開は、排水の発生源としての本来業務に加え、学生や市民に対し生態系について考え学ぶ場を提供しているという意味で、意義あることだと思う。これからも、施設公開や環境講座等を通じ、地域住民に対した環境教育の場づくりをしていただければと、市民の一人として期待している。
　最後に、拙文を書くことを通じ、環境保全について考える機会を与えていただいたことを、大変感謝している。

参考文献
「新環境学がわかる」１９９９年　朝日新聞社
「環境原論」　２００２年　平野敏右著　丸善（株）
「環境白書（平成１５年版）」２００３年　山口県